先生とお母さんへのエール　はじめに

　私が教師として子どもたちの前に初めて立ったのは、東京下町の小学校でした。
　1977年４月のことです。
　「下町は君にあっているよ。頑張って！」
　お世話になった大学の先生方は、そう言って送り出してくださいました。
　元気だけが取り柄の私へのはなむけの言葉でした。
　それから38年間、ずっと下町の教師であり続けました。
　荒川を挟んで隣り合わせの２つの区で４つの小学校にお世話になりました。

　定年退職の年の2015年春、『クレスコ』（全日本教職員組合の月刊誌）から原稿依頼がきました。新人教師を励ます企画です。４年間務めた全日本教職員組合女性部部長としての最後の仕事になりました。「無数にあるはず、励ましのたね」と題して、先輩教師からのメッセージとしました。そこには私が新人教師だった時のとりくみを書きました（本書153ページに収録）。
　退職後は再任用短時間勤務・新人育成教員として、引き続き教育現場に留まることにしました。１年ごとの更新で最大５年間勤務することができます。仕事は文字どおり、大学を卒業したばかりの新人の先生を育てることでした。
　その最初の勤務先が、私の初任の学校でした。何というご縁でしょうか。

おかげで、当時の教え子や保護者の方に再会することができました。
2020年３月、５年の任期を終えました。その間、５人の新人教師に出会うことができました。
そして、通算43年間、下町の教師生活が終わりました。コロナ禍の春、私の第二の退職です。

以下、本書の概要です。
序章では、私の教師像について書きました。いわば、私の自己紹介的な章です。
私の教師像がどうやって作られてきたのか。大学時代、結婚・出産・子育てを通して女性教職員の視点、教職員組合活動を通しての側面から振り返ってみました。
１章は、東京民報に５年間連載したコラム「美恵子先生の子ども・教育」です。
コラムがご縁で、他地区の組合や子育てカフェ、短期大学の就職セミナーの講師の依頼などをいただきました。初めてお会いした方とは思えないほど熱心に話し合うことができました。「子ども・教育」のテーマは話題がつきません。
２章は、いろいろな誌紙へのこれまでの寄稿文をまとめたものです。
「しんぶん赤旗日曜版」2013年３月、「しんぶん赤旗日刊紙」2016年３月の記事は共に、小学校入学を控えた保護者の方に向けたアドバイスです。
全日本教職員組合女性部発行のブックレット『みんなで学ぶ女性

の権利―男女ともに生きいき働き続けるために』（2013年４月発行）は、女性の権利獲得の歴史と権利の内容を学べるものです。これを活用して全国に学習会を開こうと呼びかけました。私は、「我慢しないで！　セクハラ・パワハラ」と「あとがき」を全教女性部長として担当しました。その後は、学習会の講師として、青森と群馬におじゃましました。

『福島から伝えたいこと第２集―奪われた尊厳を取り戻すために』（2013年４月発行）、『第３集―希望は闘いの中に』（2015年10月発行）は、共に福島県立高等学校教職員組合女性部発行のブックレットです。

第１集は全国女性教職員学習交流集会香川（2011年）でのカンパで作成され、2012年４月に発行されました。その後の第２集は全教女性部長として、第３集は元全教女性部長として寄稿しました。東京電力福島第一原発事故による放射能汚染は今も続いています。

『クレスコ』（全日本教職員組合発行の月刊誌）2015年４月号の特集「教師になったあなたへ2015」での、「無数にあるはず、励ましのたね」は、先輩からのメッセージです。

『学習の友』2015年６月号「生活から見た労働時間・家族との時間を奪わないで！」の企画で、「制度のおかげで職場に戻ってこれた―組合が勝ち取った介護休暇制度」は、私の体験です。

『婦人通信』2017年５月号の特集「教育の危機―今こそ子どもの育ちを考えよう」では、「学校現場はいま―追いつめられる教師たち」と題して、学校現場報告をしました。

『教育』2018年７月号「円窓・ジェンダーのまなざし」のコーナーでの「平等を問う私の原点」は、私の父母のことを書いたもので

す。「教育のつどい」ジェンダー平等分科会の司会を５年間務めたことで、研究者の方々との交流ができました。

３章は、東京童話会の会報『話の研究』に寄稿した「私の童話のあゆみ」です。会報は月１回発行で、会長は屋代定男先生。2004年５月から2005年４月まで12回連載されました。

東京童話会は、教室で子どもたちに語る童話を研究する団体です。私は一から教えていただきました。月に一度の定例会は、厳しくもあたたかいものでした。東京都公立小学校児童文化研究会の童話部の研究母体でもあります（会は2011年解散）。私が今日まで研究を続けることができたのは、素話（語る童話）の魅力を丁寧に伝えてくださった先輩方のおかげです。機会のある度に区や市の児童文化部の講師として素話の魅力をお伝えしています。

本書は私の二度目の退職により教育現場を離れることがきっかけで出版されました。５年間にわたり掲載された東京民報「美恵子先生の子ども・教育」コラムをまとめて、もっとたくさんの方に届けたらどうか、ということが出発点でした。

「教育の話って面白いんだね。教育に関心を持つようになったよ」

「読んでいますよ。あたたかい気持ちになりました」

と、「美恵子先生の子ども・教育」コラムを読んでくださった方からある会合で声をかけられました。お一人は初めてお会いする男の方でしたので、とても驚きました。新聞の影響力は大きいです。本にしたら、もっとたくさんの方に読んでいただける。そのようなことで出版に至りました。

　子ども・教育は全ての市民の関心ごとです。この本をきっかけにして教育を語り合えることができたらどんなによいでしょう。

　コロナ禍で突然の３月休校から３か月が過ぎ、６月の学校再開となりました。「学校に行けて、うれしい」「でも、コロナが心配」は子どもたちの声です。大人が知恵を出し合って、子どもたちのために声を掛け合っていくときです。（なお、登場人物の名前は仮名としました）

2020年7月　　井上美恵子